

---

## 魔導戦記らき すた？

可能性の出来損ない

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

魔導戦記らき すた？

### 【Nコード】

N7219Y

### 【作者名】

可能性の出来損ない

### 【あらすじ】

魔導新世紀リリカルなのはの時系列で行われるらき すた二次創作です。

一応、登場人物はガンダム、リリカルなのは、らき すた、クイーンズブレイドの4作品ですが、途中で参加する作品があるかもしれません。

基本的に原作は崩壊…作者の妄想で話は進みます。  
不定期更新

【途中で話が止まるかもしれません】

## 第1話 序章…（前書き）

魔導新世紀リリカルなのはと同じ作者の作品です。  
主人公はレイヴン

## 第1話 序章…

暗闇が続く世界…そこで一人の少年は目を覚ます。傷を負っているが、記憶は無く今まで自分のしていた事さえ覚えてはいなかった。起き上がり周りを見る。様々な世界の記憶が、自分の脳裏をかけるが、答えは出ず再び世界は変わる。先ほどの世界とは比べ物にならない程、文明が進化した世界…少年の前には、見た事も無い建造物や乗り物が存在していた。次々に変化する世界。夢なのか、現実なのか、少年には理解すら出来ず、ただ移り行く世界の流れに乗るだけだった。

（一体…何が起きた？俺は誰なんだ）

世界転移…度重なる未完成の転移により、少年は自分の名前すら覚えてはいなかった。唯一、自分を証明出来るものは、この世界に釣り合わない血で汚れたペンダントだけだった。何も知らぬ世界で生きる事を余儀なくされた少年は、この世界の事を知る為に歩み出す。だが何処で負った傷なのか分からぬ怪我に蝕まれ、歩く事さえ無理な状況だった。

（クツ…奴の置き土産のせいで、満足に動かす事も出来ない）

足を切り落とせば、この苦しみから解放されるが、それでは根本的な解決に成らず、少年は怪我をしているにも関わらず、歩き出す。流石に邪魔になる所で倒れる訳には行かず、近くの公園内にあるベンチで横になる。

（本当に忌々しい。これが罪か）

持ち物の中から、薬を見つけ足に垂らす。異常な痛みが少年を襲うが、必死に堪えて痛みが消えるのを待つ。その間に空を見ていると、何時の間にか寝てしまう。痛みが消え、目を覚ますと目の前に青いアホ毛とこちらを覗き込む顔が見えた。それに驚いた少年は起き上がり、自分を見ていた少女を見る。

「その恰好…君はRPGの人間？それともアニメの人間？」

「何の話だ？この世界の人間で無い事は確かだが、アニメでもRPGでも無い」

「じゃあ異世界の人間？」

「俺が知りたいぐらいだ。自分の事も過去の事も」

少年が記憶喪失だと理解しアホ毛の少女は、考える。流石にこのまま此処に残せば、問題になる事は確かなので、自分の家に連れて行く事を決心する。自分の決めた事を少年に話そうとすると、突然に目の前の次元が歪み、人間とは思えぬ存在が現れる。明らかに異界の存在は少年を狙うが、一瞬で異形の存在は切り裂かれた。

「お見事…流石は王の素質を持つ者ですね」

「お前は何者だ？俺を知っているのか」

「あなたはレイヴン・ロイト。ウォーに復讐する為に生ける屍ですよ」

「お前の言う事を信じる訳は無い。だが名を覚えてくれたのは、感謝する」

レイヴンは敵を睨み付ける。向こうも本気でこちらを潰す訳では無い為に撤退を開始する。事を大袈裟にする訳には行かず、レイヴンも闘争本能を鎮め、向こうの撤退を確認する。

「悪いな、えつと…」

「泉こなた。君のお姉さんさ！！」

「こなた…サンキューな」

「いや何もしてないよ？それより、君は追われてるの？」

思い出した範囲で、レイヴンは話す。ウォーの事、エルガストの事、自分の事を…話を聞き大体の事情が呑み込めた、こなたは改めて、レイヴンの危険性と彼の置かれた立場を考えて、保護を優先する。

「君にその気があれば、私と一緒に来てくれるかな？」

「俺は危険だ。こなたにも迷惑をかける」

「大丈夫だよ。私にも強い仲間はあるよ？」

「俺は迷惑をかけたく無い。厚意は嬉しいが、拒否させて貰う」

レイヴンが歩いて行こうとすると、横から運よくサッカーボールが

飛んで来て、レイヴンの頭部に命中する。いきなりの事に防衛さえ出来ず、レイヴンは倒れる。

(ラッキー……)

こなたは気絶したレイヴンを背負い帰路へと着いた。そして時を同じくし、こなたの友達が務める【時空管理局】では、異常な現象が確認されていた。

「はやて、次々と人が消えているって本当なの？」

「本当や…今、刹那君とスウェン君それになのはちゃんが原因を調べに行つとる」

はやての言葉を聞き、フェイトは無断で転移装置を使い転移を図るが、クロノに止められる。そして刹那達は最深部である者と遭遇していた。

「あれは…リボンス・アルマーク!!」

「久しぶりだね、刹那・F・セイエイ」

「何故、此处に居る？」

「今度こそ神になる為さ。僕は君と同等いや…それ以上の力を手にした」

発する気は以前と比べ物にならず、周りを囲む結晶を砕くほどだった。流石に危険を感じた刹那は、二人に退却を命ずるが退路も塞がれてしまった。

「刹那、君だけでも逃げろ」

「粒子化なら結界を抜け出せるよ」

「逃がさないよ。君は此处で僕に倒されるんだ」

「クッ…トランザム!!」

リボンスの攻撃を回避し、刹那は苦しながらの離脱をする。そして振り返った時には、燃える結界の中で消えて行く二人の姿だけだった。二人の思いを胸に刻み、刹那は管理局へと戻った。

第1話 序章…（後書き）

世界の崩壊と始まり

次回【混沌世界】

世界は一つとなる

## 第2話 混沌世界（前書き）

1話から一年後と言う設定です。

【ちなみに、烈斗と言う名はレイヴンの偽名です】

## 第2話 混沌世界

「違うよ、此処はこの選択肢を選ぶ」

「……………」

こちらの文化を知る為に、烈斗は常識人？である、こなたに勧められたギャルゲーと呼ばれる物やネットゲ、アニメと言う物を教えられていた。

「またBADENDだよ……」

「俺が悪いのか？」

「まったくそれじゃかがみと付き合えないよ？」

「私は関係ないでしょうが……」

何処からか来た、かがみの攻撃により、こなたは吹き飛ぶ。こなたを吹き飛ばすと同時に烈斗の手にあるコントローラーを奪い、ゲームの電源を切る。

「こなた、烈斗に変な事を教えるな……」

「オタクは文化だよ。日本が世界に誇れる文化なんだよ、かがみ……」

「そんな訳があるか……！少しはニュースぐらい、見なさいよ」

「……………」（話に入れない）

完璧にかがみが支配する中に烈斗は入れず、こなたとかがみのやり取りを見るだけだった。そして一時間経過……ようやく、かがみとこなたは口喧嘩を止め、二人は烈斗を見る。

「結果論で言うと、烈斗をオタクに巻き込めばいいんだ……」

「やらせるか……！烈斗は常識人にしないと人づきあいが……」

「大丈夫だよ、オタクと常識人も分かり合える刹那の力ならば……」

「いや……流石に無理だろ。分かり合う以前の問題だと思っぞ？」

永遠ループの様に続く二人の門答に烈斗は耐え切れず、気絶する。

かがみは烈斗の以上に気がつき、こなたが自分の世界で話を始めている最中に、かがみは烈斗を引き摺って降りて行く。

「つまり私たちは、進化したものと言う事だよ。かがみん！！つてあれ？」

自分の世界で話をしている最中にかがみと烈斗は居なくなり、こなたは外を見る。外では恋人の様に歩く二人の姿が見えた。急いで追いかけてよとするが、この前、録画を忘れた番組の再放送がある為に追いかけるのを断念してテレビの前に行く。

「烈斗、大丈夫？」

「別に身体系の異常は無い」

「いや…そう言う事じゃ無くて、こなたと過ごすよりも私達の方があんたの為にいいと思う」

「???」

かがみの言いたい事を理解できない烈斗は、頭の上に？マークを出す。知能は低くは無いが、何分記憶喪失の常識率が無い為に世界の常識を理解する事は出来なかった。その点を考慮しても烈斗を引き取る十分な理由だった。

「烈斗、ついて来てくれる？」

かがみに言われて、烈斗は何も聞かず、黙ってついて行く。その光景を後ろから見ている者がいた。

「あれが…生ける屍か」

「殺す事は出来ない。お前は奴を捕えろ」

「隣に居る女はどうする？」

「規格外の存在に意味は無い。抵抗する様なら、殺せ…」

指令を受け帽子を被る男は頷き、追跡を開始する。指令を言い渡した、もう一人の男は失敗を覚悟しながら、撤退していく。そんな事に気づかぬ二人は、かがみの家に着き、入ろうとする。だが烈斗は自分を見ている殺気を感じ、かがみに訳を話した後、自分を見ている存在に近づく。

「俺に何の用だ？」

「お前は俺に捕まれ」

「……………」

「無言か、なら手足は切り落とさせて貰うぞ!？」

烈斗の目の前から消えるが、目を閉じた烈斗の斬撃を回避できず、腕が切り落とされる。異常な殺気を放つ、烈斗に撤退を余儀なくされるが、烈斗は逃がす気は無くウォーの弱点である【デビル・コア】を貫く。

「お前の様な雑魚に俺は殺せない」

「どうして…デビル・コアの位置を把握できる？」

「……………」

容赦無く、刺し殺し烈斗は日本刀を抜き、その場を去る。

「駄目ですね。やはり…記憶は無くとも、黒鳥は生きていると言う事ですか」

ウォーの死体に付着する血を指で取り、試験管らしき物に入れて、検査紙を入れる。数分経つと、元々は白い紙が徐々に紫色となり、黒鳥だと断定できた。

「お邪魔します…」

「あつ、烈ちゃん。お姉ちゃんが呼んでるよ？」

「すぐ行くよ、つかさ」

階段を登って、かがみの部屋をノックする。返事が聞こえ中に入ると何時の間にか、こなたがかがみの部屋で話し合いをしていた。

「お……烈斗」

「こなた!？何故、ここに？」

「どうしてもね…かがみが烈斗と一緒に居たいって言うからね……」

「違う!!私は、ただ常識人となって欲しいだけ」

顔を赤くして、かがみは否定する。二人の会話を聞く烈斗は再び混乱する。流石に結果が出るまでは、此処に居させるのも危険と判断して、つかさの部屋に烈斗を入れる。

「悪い…つかさ」

「私は別にいいよ……でも、勉強を見てくれる？」

「別に構わない。俺に分かる範囲ならな」

かがみ達が話している間、烈斗はつかさと共に受験勉強をしていた。二人が勉強に集中していると、かがみ達の話は終わった為に、つかさの部屋に入ろうとする。

「終わったよ……二人とも……」

「次は数学か？」

「うん……一応、出来る事は出来るけど、辛いよね」

「公式さえ組み立てれば、一応、出来るだろ？」

まるで恋人の様に話す二人を見た、こなた達はしばらく二人を放置し今後の事を話し合う。やはり、烈斗の出世を教えた方がいいのか、迷うが教えて事が重大になる事だけは、避けたい為に話す事は止めた。

「混沌世界……その未来図が世界を滅ぼすか……」

「その意味はどう言う意味なんや？」

「世界は死に生は世界を包む」

「つまり……全世界の融合と言う事か？」

管理局の人間が機動六課の部隊長【八神はやて】に話す事は、近い将来、全世界に起きる事だった。

「スウエンとなのはのM I Aは必然と言う事か？」

「それは、世界の真理に触れし者で無ければ分からない」

「……………」

「そしてその時代は今、此处に成す……！」

突然の地震が起き、ミッドチルダを自然災害が襲う。管理局のコンピューターは壊れ、全世界規模で確認され世界は一つとなる……そして新たな物語が始まった。

## 第2話 混沌世界（後書き）

遂に世界は滅亡し混沌の時代が始まる。

次回【ユニコーンの日】【前編】

ガンダム…それは希望それとも絶望？  
次回からはバナージが主です。

「ガンダム、俺に力を貸せ！！」

### 第3話 ユニコーンの日 前編（前書き）

今回はバナージが主となります。

### 第3話 ユニコーンの日 前編

「オードリー…俺は…」

「目覚めよ、白き一角獣…【ユニコーン】」

「たった一つの望み、ガンダム…」

夢の中で俺は誰かの声を聴いた。少しずつだが、視界は回復し目覚めが起きると同時に俺は予想もしない一つの街で倒れていた。過去の事は思い出せない。ただ頭の中に【可能性の獣】と言う言葉だけは浮かぶ。自分が何者で、何処から来たのか、それさえも気づける筈は無かった。

「思い出せない…大事な事を忘れている気がする。そもそも此処は俺の居るべき世界じゃ無い？」

自分が感じる言い切れぬ程の不安。だが原因も判明せず、自分の中で答えさえ見出せず、俺は街を彷徨う。信じられる事も自分の成すべき事も分からないまま、約三日の時間、答えを探し歩いていた。

（俺は…世界に見放されるのか）

自分と言う存在を唯一とする方法も無く、自分の名前すら思い出せない俺は死を待つだけだった。本当は成すべき事、守る者…その全ても気づいている筈だった。でも…自分の中で否定と言う気持ちが強くなり、本当の答えを曇らせていた。

「可能性…人間だけが持つ内なる神…」

「答えろ、貴様は何が目的だ…！」

「刹那、お前には世界と生きる権利は無い。ここで死ね…！」

頭の中に響く声、確実に自分の探すべき者とは違う声だが、急に聞こえる声に導かれる様に、俺は彼らの居る戦場に踏み込む。

「！？…何者だ」

「俺は、あなたの味方です」

「……今は共闘を選ぶしか無いと言う事か」

「話し合いは終わったか？刹那、バナージ」

先ほどの会話で、刹那と言う名は聞いたが、バナージと言う名を聞かなかった俺は驚きながらも相手を見る。向こうは本気で戦闘を行う気が無いのか武器を構える事も無かった。

「お前は何を知っている？」

「我は世界と言う秩序を壊す為に世界を壊す」

「どうして…俺や彼の事を？」

「バナージ・リンクス、貴様はオードリーを探しているのだろうか？」  
妙に頭の中に残る言葉【オードリー】バナージは直感で思い出そうとするが、特徴も彼女の事も思い出せなかった。刹那は横で苦悩するバナージを見て、敵を見る。やはり戦闘と言う事をする気力すら感じられず、まるでバナージと自分を合流させる為に現れたかのような気配だった。

「お前達が求める物は、混沌世界にある」

「混沌世界…それが、この世界」

「お前は何故、教える？何が目的だ」

「言った筈だ。世界を壊す為だと…な」

言葉を残し消える。今の状況を確認する為に、バナージは刹那と協力しようとするが、断られる。

「済まない…もう少し俺は調べる必要がある。この世界の存在する意味を…」

「無理強いはしません。それで、一つだけ聞きたいんです。この世界は？」

「それを聞くななら、俺より確実な人物が、この先の【インダストリアル7】に居る」

「インダストリアル7。ありがとうございます。気を付けて」

刹那と別れ、バナージは東に在ると言われる街【インダストリアル7】を目指し歩みを進めた。

「大丈夫か、かがみ？」

「ええ急に驚いたけど、怪我は平気」

突然の出来事に覚えている事は少ないが、烈斗とかがみの二人は今

の状況を整理する。村人や村長の話で、この世界が自分たちの居た世界で無い事は確かだった。混沌世界、一般的に呼ばれる名で危険な世界でもあった。一応、こなたとつかさの情報収集も行うが、有力な手掛かりは得られず、次なる街【ミッドチルダ】を目指す事にした。

「行くぞ、かがみ」

「烈斗、長旅になると思うし食料はいいの？」

「俺は現地調達をする。それが一番効率のいい方法だ」

「食べられるものにしなさいよ…」

一応、サバイバル経験があると言っても、此処は常識の通用しない世界なので、危険は避けられなかった。村人や村長達の話では、此処の近辺に魔物と呼ばれる存在は無く、世界の中から見れば、安全な場所と言う事だった。森や山にある物も大抵は食べられる物で危険な木の実も殆ど存在しないからだった。

「此処が…アーバレスの森か」

「何か、宗助の乗るASみたいね」

「危険は無い。突っ切るぞ」

二人は森に入り、次なる街【ミッドチルダ】を目指した。

### 第3話 ユニコーンの日 前編（後書き）

混沌世界…何の為に存在するか分からぬ世界で、一つの可能性が奇跡の白き一角獣を呼び覚ます…。

次回【ユニコーンの日】【後編】

「人の心を、哀しさを感じる心を知る者なら、《ガンダム》！  
おれに力を貸せ……！」

「ユニコーンガンダム、バナージ・リンクス行きます……！」  
今、一つの可能性が一つの奇跡を呼び覚ます。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n7219y/>

---

魔導戦記らき すた？

2011年11月23日16時56分発行